

第 52 回 全国造園デザインコンクール 入賞作品集

(一社)日本造園建設業協会

第 52 回 全国造園デザインコンクール 全体講評

審査委員長 入江 彰昭

(東京農業大学 地域環境科学部 地域創成科学科 教授)

今年の応募数は 627 点と多数の応募があり、農業高校ばかりでなく工業や実業などの専門学科、普通科の高校からの作品もあり、すそ野が広がっていることを実感致しました。これはひとえに生徒や学生と日々向き合っておられる先生方の熱心なご指導の賜物でありそのご尽力に敬意を表します。

今年はデザイン表現にとどまらず、コンセプトとともに場・空間・時間を語って伝えるストーリーテリングの手法を用いた作品が多くみられました。例えば雨と晴、季節、年、未来、人生などの時間をデザインした作品、空間を積層化させ、場の利用を提案した作品、産学官民の連携、社会課題に対応した公園 DX の作品などです。なかには庭園や公園の枠を超えて、都市や地域、社会の再デザインへ誘う提案がみられました。

若い皆さんが社会課題を発見しそれに対する解決策を考え、新たな価値を創造する力を育まれていることに明るい未来を感じ大変勇気づけられました。本コンクールが今後も皆さんのポジティブな学びの場となり、切磋琢磨を通じて造園への理解が深まることを強く願っております。

文部科学大臣賞

◆受賞者:神奈川県立相原高等学校

(審査委員)

文部科学省 初等中等教育局 参事官(高等学校担当)付 産業教育振興室 教科調査官
国立教育政策研究所 教育課程研究センター 研究開発部 教育課程調査官 吉田 幸人

今年度も、情熱を注いで制作された、素晴らしい作品の数々に出会うことができました。その中でも、学校全体で造園デザインに熱心に取り組まれ、多くの充実した作品をお寄せいただいた神奈川県立相原高等学校が、今年度の文部科学大臣賞を受賞されました。

受賞作品は、いずれもコンセプトが明確で、優れた技術力と豊かな表現力を備えています。また、社会的課題への深い理解と、時代が求める価値への応答がありながらも、高校生ならではの自由な発想と、目を見張るような創造性に満ちた作品でした。各学校におかれましては、本コンクールを学びの成果を発表する貴重な機会として活用いただき、今後も基礎的・基本的な知識と技術、そして感性や表現力を一層磨かれ、これからの造園分野を力強く担っていく人材の育成に努められますことを期待しております。

来年度も、創造性あふれる作品に出会えることを、心よりご期待申し上げまして、講評とさせていただきます。

国土交通大臣賞

◆受賞者:神奈川県立相原高等学校 櫻井 心捺 氏

◆作品名:めぐる庭

(審査委員)

国土交通省 都市局公園緑地・景観課緑地環境室長 望月 一彦

入賞された皆様に心からお祝い申し上げます。今年も、社会課題の解決に資する造園空間をデザインした作品や、伝統的庭園技法を用いた実習作品など、多くの優れた作品を拝見する機会に恵まれました。持続可能な社会に向け「緑」が持つ多様な機能が重要な役割を持つことの認識が、次代を担う学生の皆さんに浸透していることを実感した次第です。

国土交通大臣賞には、住宅庭園部門・高校生の部から、櫻井心捺さんの「めぐる庭」が選定されました。「めぐる」の言葉には、庭の鑑賞、庭の自然循環、菜園のある生活で住人が「育てる、食べる、癒される」循環という3つの意味を持たせ、SDGs やネイチャーポジティブを実現しようとする想いを込めた庭の提案です。水彩画による豊かな彩色と作画技術、見る人を惹きつけるわかりやすい表現力も大変優れており、総合的に最も優れた作品として評価されました。

次回も素晴らしい作品に出会えることを楽しみにしております。

めくろ庭

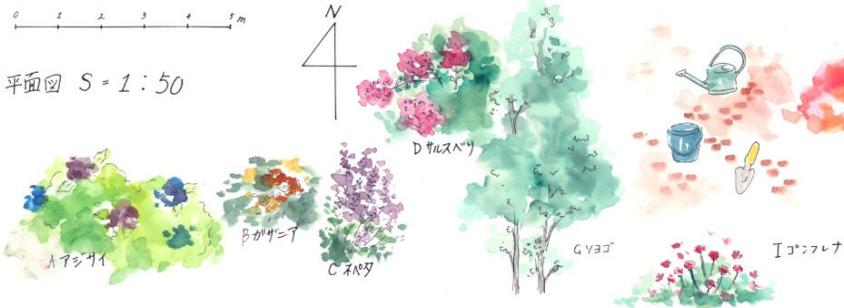
全体平面図



0 1 2 3 4 5 m



平面図 S = 1 : 50



設計趣旨

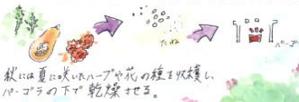
家庭菜園から始まる SDGs をコンセプトに住人のウェルビーイングと生物多様性の維持を両立するデザインにしました。庭の中心にはパーゴラを置き、自然の方で夏を涼く過ごせる工夫をしました。ボタジェでは相性の良い植物と一緒に植えて、農業に頼らない野菜作りと資源の循環を目指します。また、多くの生き物を呼ぶサステイナブルガーデンを作ることで自然を守る役割などのグリーンインフラとして機能します。「育てる・食べる・癒される」という日々の循環が、住む人の健康と地球の豊かさを同時に守る、持続可能な庭を提案します。

住宅庭園計画図

ボタジェガーデン 野菜、ハーブ、草花を組み合わせて「景観の美しさ」と「育てる楽しさ」を両立させたフランス式家庭菜園です。

コンポストボックス

木枠で作ったコンポストに生ごみを投入。有機肥料を作りこみの排出を減らします。



夏野菜の片付けや出たものや剪定は枝も入れ、冬の間に豊かな土へと還します。

生ごみなどは勝手口からすぐ入れることができます。

レイズドベッド

厚材を再利用して木枠やレンガで一段高した花壇。管理しやすく、美しい空間 作りを目指します。

農作業の足下休憩としてのベンチ

フドニアを利用し、雑草抑制と温度調節の効果



夏は勝手口の裏にブルーベリーを収穫することができます。H アブルベリー

シードセービング

育てた植物から種を取り、来年またその種をまくこと、毎年の種へのコストを削減、その土地に適応した品種になります。

パーゴラ

休憩スペースだけでなく、垂直方向にも植物を植栽し、緑のカーテンとして機能します。

冬には落葉し日の光が室内に届きます。

パイプが流れてくる雨水をタンクに貯める。



多年草

ローメンテナンスで植え替えの回数が少なく土の微生物などの環境を壊しにくいです。お礼を返すことで土地を守ることにつながり、生物多様性を維持します。

庭の中心に置かれたのは、お礼や野菜の命を返す方法があり、お礼を返すことで水害による被害や土壌侵食の緩和が、住む人の生活態度に伝わる循環を促します。

冬にはお礼を返すことができます。

雨水タンク

(公社)日本造園学会会長賞

◆受賞者:群馬県立藤岡北高等学校 二宮 恵美香 氏

◆作品名:Open space 法～公園を、まちを育む～

(審査委員)

公益社団法人 日本造園学会理事・千葉大学大学院園芸学研究院 教授 木下 剛

この作品は、都市公園をとりまく近年の状況——「守る」から「活かす」への転換——をふまえ、オープンスペース法という新たな法律を制定、産官学民による新たな公園まちづくりの方法を提案するものである。具体的には、まちづくりの社会実験を培養するスタジオ(園内)の設置を定めているほか、公園に参加と可変性を促すモバイルグリーンの設備や、緊急時やイベント時に自家発電・蓄電できる路面式太陽光発電を提案している。また、公園の利活用に係る新たな財源確保の方法や、地域社会が公園を日常的に観察できるアプリを導入するなど、新しい技術が提案されている。

街区公園計画図

Open space法 ~公園を、まちを育む~

【設計趣旨】

公園は法律によって姿を決められている。すなわち、法律が変われば公園の在り方も変わる。かつて公園用地の転用を防ぐために制定された都市公園法は、現代においても重要な役割を担っている一方で、その枠組みが固定されていることにより、新たな課題を生み出している。そこで本提案では、都市公園法に代わる新たな法律として「Open space法」を制定し、法律に基づいた産官学民の協働による、公園づくり(まちづくり)を提案する。

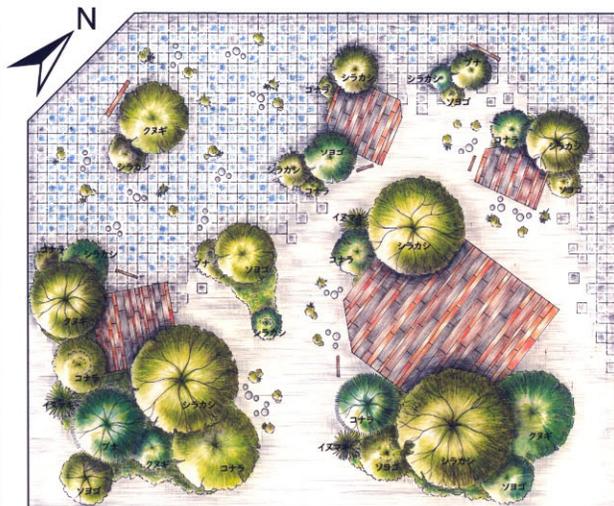


【Open space法制定】

近年、都市公園法の改正により、公園を活用するための仕組みが導入され、公園を「守る」ことから「活かす」ことへの転換が進められている。しかし、街区公園に代表される小規模公園においては、活用の機会が制限されており、依然として多くの課題が残されている。そこで、公園を単なる施設ではなく「オープンスペース」として捉えなおし、「守る」法律から「活かす」法律へと転換するため、新たにOpen space法を制定する。

Open space法(条文案)

第一条 オープンスペースを核に、産官学民でまちを育てる



全体平面図

0 1 2 5 10 20m

S=1/200

【まちづくりの核、社会の実験場】

公園はこれまで、社会の実験場としての役割を担ってきた。本提案では、その価値を最大化するため、園内に設置された建物を「Experiment studio」として位置づけ、地域住民にまちづくりの場を提供する。

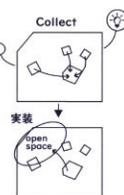


まちづくりとは、何かを完成させることではなく、「まちづくりが行われている状態」そのものを指す。そのためには、「やってみよう」という気持ちを喚起する空間の存在が重要であるとともに、人が集まる仕掛けが必要である。建物内部にはホワイトボードを設置し、住民の意見や考え、アイデアを書き留めることで、まちづくりを促進させる。



【公園への愛着の形成】

建物の看板を産官学民で作成することにより、愛着の形成や持続的な利用、まちづくりを促す。



【路面式太陽光発電「Wattway」】

公園は防災などのインフラとしての機能も担う必要があるため、緊急時に電力を使用できるよう、自家発電・蓄電の仕組みを導入する。地面には路面式太陽光発電「Wattway」を設置し、発電した電力は電気キャビネットに蓄電する。これにより、緊急時だけでなく、イベント時や定点カメラ、建物への電力供給にも活用できる。

第二条 維持管理費および活用に係る費用については、まちづくり関連予算の一部を充当する

公園の課題の一つに維持管理費への投資余力が乏しい現状がある。しかしこれは、公園を単独の施設として捉えていることに起因する課題である。予算立案の段階から公園をまちづくりの核として位置づけ、まちづくり予算の一部を使用して公園管理に充当するとともに、公園活用費として新たな事業展開を行う。



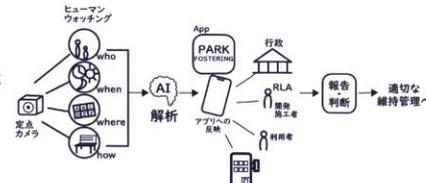
【空間をつくる・動く緑「Mobile Green」】

公園を可変的な場と捉え、利用者自身が空間を構成する仕組みとして、「Mobile Green」を導入する。住民が空間を構成する裁量を持つことは、主体的な関与を促し、より良いまちづくりにつながる。

第三条 オープンスペースの状態は、観察によって把握されるものとする

現在の公園管理は、年に一度の点検に留まっており、日々変化する公園の状況を把握する仕組みは十分に整っていない。そこで、ヒューマンウォッチングをはじめとする観察手法を導入し、産官学民が関与する管理体制を構築する。

「PARK FOSTERING」アプリの開発 fosteringとは、システム管理を意味するmanagementとは異なり、公園を「育てていく」という考え方である。公園は完成して終わるものではなく、完成のない空間として、半永久的に育まれていく存在である。



(一社)日本造園建設業協会会長賞

◆受賞者:京都府立農芸高等学校 野々村 光翔 氏

◆作品名:丹波霧から現れる幸せの使者 ~泣かぬなら私が泣こうほととぎす~

(審査委員)

一般社団法人 日本造園建設業協会 業務執行理事・技術委員長 伊藤 幸男

今年度の日本造園建設業協会会長賞は、高校生の実習作品部門の中から野々村光翔さんグループの作品を選びました。岐阜の緑化フェアに携わったことを機会に地元地域との関連性を見つけ出し、それをテーマとした流木オブジェを組み込んだデザインアイデアは、とても良いアプローチです。作品も草花や景石との配置バランスがよく考えられていて、きれいに仕上がっています。また、それをグループのみなさんが力を合わせて施工している様子が見られる写真とともに、良いプレゼンボードとなっています。

実習作品

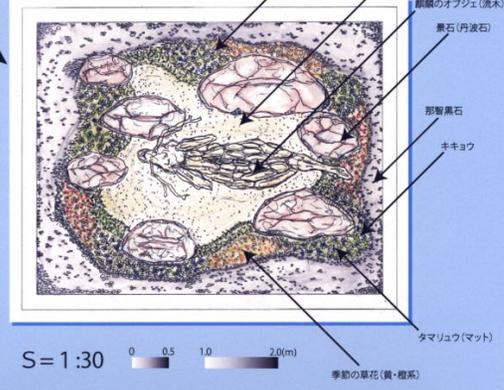
「丹波霧から現れる幸せの使者」 設計主旨

～泣かぬなら私が泣こうほととぎす～

私たちは、岐阜で開催される第42回全国園化フェアにおいて、自治体出展花壇の制作に携わることになりました。丹波と岐阜を結び存在として、戦国の武将・明智光秀に着目しました。光秀ゆかりの地である両地域を「幸せの使者」としてつなぐ象徴として、私たちは「麒麟」をモチーフにした花壇を作りました。この制作した花壇には、日吉ダムに集積された流木を活用し、丹波盆地に麒麟が浮かび上がるような流水アートをつくりました。地域の環境資源を生かしたこの造形物に命を吹き込み、色とりどりの草花を組み合わせることで、自然と歴史が調和した新しい景観を創り出します。

コンセプトは「丹波霧から現れる幸せの使者」。
また、「なかぬなら、わたしが泣こう、ほととぎす」という光秀にまつわる言葉を、私たちに「相手に寄り添い、地域を支え合う姿勢」として捉え、前面に込めました。流水の力強さと草花の優しさが響き合うデザインを通して、両地域を繋ぐ思いと、未来への希望を表現しています。この花壇が、多くの人にとって笑顔と幸せを運ぶ存在となることを願っています。

平面図



◇区画の資材サイズを求めて高校間連携の実施（北桑田高等学校京都府フォレスト科）

◇資材の伐割、枝払い体験風景



◇製材の体験風景



◇原木を区画サイズに製材



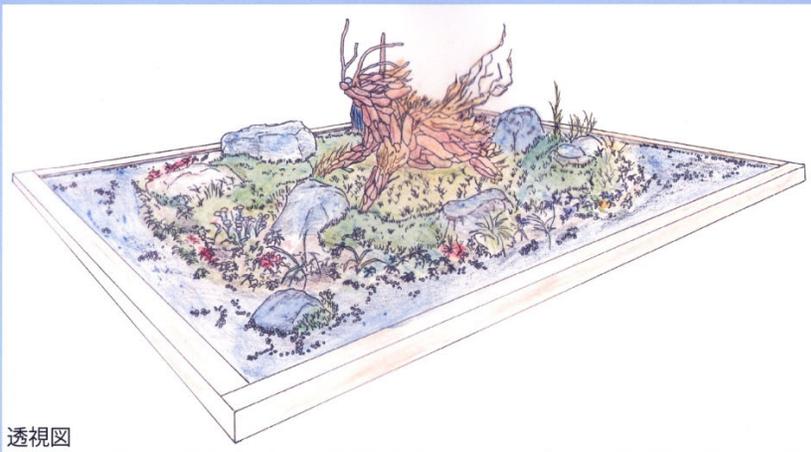
◇日吉ダムに訪れ、流木収集



◇流木お兄さん作品の視察と交流



◇区画の設置と流水アートのレイアウト風景



透視図



◇4月地成写真（春花壇）



◇6月輝き揃ってスイートアリッサム（春花壇）



◇6月輝き揃った完成写真



◇夏花壇の完成写真

(一社)ランドスケープコンサルタンツ協会会長賞

◆受賞者:豊田工業高等専門学校 木田 琴奈 氏

◆作品名: 時を薄める 都市の速度を、食べる公園

(審査委員)

一般社団法人 ランドスケープコンサルタンツ協会 井野 貴文

今年は街区公園部門の応募数が昨年と比べて約 50 作品増えました。その中でも大学生より高校生の提案に、より魅力的なものが多かったことが印象的でした。激戦となった街区公園部門の中から、都市の目まぐるしい速度を和らげる都市装置となるユニークな提案であった「時を薄める」をランドスケープコンサルタンツ協会会長賞に選ばせて頂きました。

本提案は、人が本来持っている人間の感覚を取り戻していく場として、ランドスケープアーキテクチャの役割である「人」と「自然」の関係をデザインすることに取り組んだことが非常に共感しました。自然と対峙するということであれば豊島美術館は参考になるかもしれません。

時を薄める

都市の速度を、食べる公園

この公園に置かれる構造物は、完成と同時に役割を終えない。錆び、侵食され、苔に覆われ、蒿に絡まれ、「時間に食べられていく建築」として存在し続ける。

公園が「都市の時間を記憶する場所」になる。

01. コンセプト 時間を食べ、時間に食べられる

都市の時間は速い。人は常に予定に追われ、感覚は「処理するもの」へと変わっていく。この公園は、都市の只中に、時間を薄める層を挿入する試みである。



光、音、風、匂い、湿度、素材。それらを少しづつ遅延させ、重ねることで、人が無意識のうちに「時間を感じ直す」空間をつくる

02. 現状把握 都市と公園の「時間」は断絶している



子どもは決められた遊具で、決められた遊びをする。高齢者はベンチに座り、ただ時間をやり過ごす。大人は通り抜け、滞在しない。

現代の市街地は、効率と速度を前提に設計されている。集合住宅、行政施設、研究・文化施設、サービスセンター。

それぞれは合理的に配置され、人々は「移動」と「処理」を繰り返す。

03. 原因分析

効率化された都市と、失われる感覚



「公園」に「移動手段」以外の必要がなくなってしまう。

最も身近な公共空間であるはずの街区公園は、しばしば「余白」や「余った土地」として扱われてきた。

「時間を感じる体験」も、「感覚が回復する仕組み」もない。

都市は加速し続けているのに、公園はその速度と向き合う設計を与えられてこなかった。

04. 人々の状態

感覚が鈍り、時間が見えなくなった日常



幼い親子連れで溢れかえっている様子が見られなくなっている。

共働き世帯の親は、子どもと過ごす時間の質を失い、高齢者は都市の速度についていけず、在宅ワーカーや学生は、画面の中で一日を終える。

都市の時間は「早すぎる」のではない。「均質すぎる」のである。

朝も昼も夜も、晴れも雨も、感覚の差異が薄れ、時間はただ流れるだけのものになった。

05. 発想転換 「機能の集合」ではなく「時間の構造」



忙しい都市の音

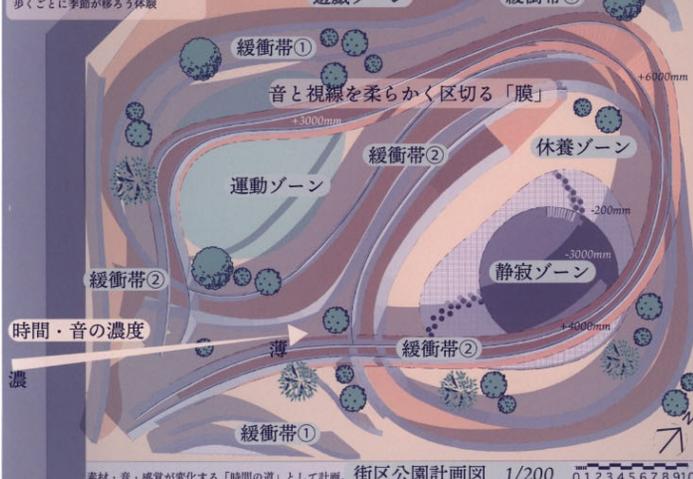
・都市に近いほど、時間は速く、音は多く、素材は硬い
・中心に近づくほど、時間は遅く、感覚は研ぎ澄まされる

街区公園は本来、感覚と時間を取り戻す最後の公共空間であるはずだ。本計画では、公園を「道具」「広場」「休養施設」の足し算ではなく、時間の濃淡によって構成された一つの体験構造として再定義する。

06. 平面構成 外周から中心へ、時間がほどけていく構成

「使う場所」ではなく「時間についていく場所」

- ① 舗装：石→木→苔 硬さから柔らかさへと足裏感覚が変化
- ② 動線：直線を避けた曲線動線 視線が絞られ、歩調が落ちる。
- ③ 季節の通路：季節の植栽を連続配置 歩くごとに季節が移ろう体験



07. プラン計画 「時間を感じる歩行体験」としての公園

07-a. ゾーニング計画 時間の濃淡による配置

- I 遊戯ゾーン：最も「速い」場所
都市に最も近い場所に、活動と賑わいを配置する。木製遊具や砂場、音を発する構造物は、鉄や木が風化し、錆び、時間の痕跡を刻む装置に。
- II 緩衝帯①：香りとお音の通路
ラベンダー、ローズマリー、タイム。香りの層を抜け、都市から感覚が切り替わる。風鈴や木道が、足音と風の存在を意識させ、小さな解説板が「立ち止まる理由」を与える。
- III 運動ゾーン：リズムを整える「中速の時間」
健康歩道、ストレッチ器具、日陰ベンチ。「運動」ではなく、身体感覚の再起動が起こる。構造物の影は時間とともに移動し、利用者は無意識に「今」を知る。



07-a. ゾーニング計画 ii 時間の濃淡を体験させる

- IV 緩衝帯②：光と影のトンネル
ペーパルと鳥標、ミスト装置。光はフィルターを通り、影は揺らぎ、音は吸収されていく。
- V 静寂ゾーン：「無時間」に近い体験を生む。
防犯の観点から高い壁で囲うことは適切ではない。本計画では、空間を掘り下げ、視線の高さをずらすという手法を採用する。「守られながら、見守られる静寂」を実現する。時間を遅延させ、薄めるものとして扱われる。
- VI 休養ゾーン：時間の停止と感覚の再起動
敷地をわずかに沈めた凹型広場の中央に、無時間のパビリオンを置く。



08. 発展

08-a. 雨を活かす設計 雨は時間を可視化する存在

- ・素材ごとに異なる雨音
 - ・壁面を伝う水流
 - ・濡れて色を深める苔と木
 - ・水面に映る空と植栽
- 中心広場は表面貯留機能を持ち、雨天時には「水に浮かぶ静寂の島」となる。非常時には時間が反転する装置として機能する。

08-b. 防災と時間 日常と非常時をつなぐ時間の層

- 防災設備
- ・かまどベンチ
 - ・マンホールトイレ
 - ・倉庫
- 日常では景観に溶け込み、非常時には時間が反転する装置として機能する。

09. 未来 時間を感じる能力を、都市に取り戻す

子どもは、変化するものを観察し、高齢者は、自分の速度で歩き、大人は、立ち止まる理由を得る。

雨の跡、苔の成長、錆びた構造。それらはすべて、この場所が生きてきた「時間の記録」となる。

都市がどれほど速くなくても、ここでは時間は薄まり、ほどけ、たまっていく。この街区公園は、都市の中で唯一、時間が人の側に戻ってくる場所である。

全国農業高等学校長協会理事長賞

◆受賞者:埼玉県立秩父農工科学高等学校 堀口 拳征 氏

◆作品名:リサイクルファームひろば

(審査委員)

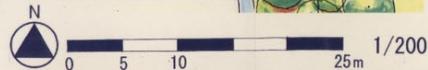
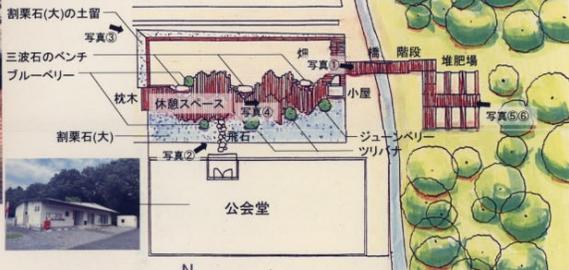
全国農業高等学校長協会 理事長 一ノ瀬 淳

受賞作品は、実習作品部門の埼玉県立秩父農工科学高等学校の「リサイクルファームひろば」となりました。こども園に隣接する、使われていなかった空き地を、「休憩場所・畑・堆肥場が一体となった魅力的な空間」へと再生した点が高く評価されました。

こども園の食べ残しや森の落ち葉を活用して腐葉土をつくり、野菜を育てる循環型の仕組みがよく工夫されています。また、休憩スペースや公民館との連携により、多世代交流や情操教育の場として地域に貢献している点も大きな特色です。さらに、限られた環境を有効に生かし、皆を笑顔にする場として、今後の活用されることが期待されます。



施工前 → 施工後



地域を笑顔にするしくみ

パース図



こども園、地域住民が『リサイクルファームひろば』を活用し、多世代交流や情操教育に役立て、皆を笑顔にする場として利用する。公会堂と連携し、イベントや勉強会の実施も可能になる。

リサイクルファームひろば

第52回 全国造園デザインコンクール 実習作品

【設計主旨】

こども園に隣接する草が生えていた空き地。管理に困っていた森の斜面。これらを活用して、皆の笑顔が溢れる場を創出。こども園で出た食べ残しや森から出た落ち葉で腐葉土を作り、畑で野菜を育てる。そして、休憩スペースで語らう。放置竹林の竹を活用し、社会問題への解決も図ったひろばです。



休憩場所、畑、堆肥場が一体となった空間
人が集まり 皆の笑顔があふれていく

緑化フェア「みどりの広場」プラン賞

◆受賞者:京都府立農芸高等学校 桐畑 一希 氏

◆作品名:京の丹景 ～亀が紡ぐ京都・丹波の景色～

(審査委員)

公益財団法人 都市緑化機構 専務理事 柳野 良明

本年も、緑化フェア「みどりの広場」プラン部門に、全国から 273 点もの作品をご応募頂き御礼申し上げます。

2026 年 9 月 18 日から全国都市緑化フェア in 京都丹波が亀岡市、南丹市、京丹波町で開催されますが、本地域の歴史文化や自然を踏まえた作品が多く見られました。高校生の皆様にフェア開催地のことを知って頂く良い機会になっていると存じます。

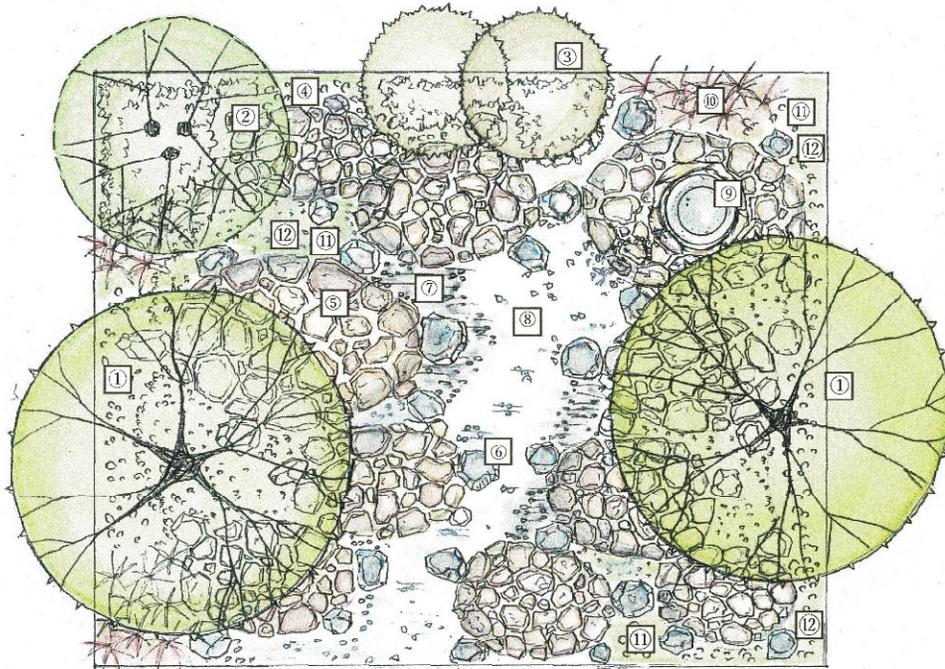
受賞された桐畑一希さんの作品「京の丹景～亀が紡ぐ京都・丹波の景色～」は、京都丹波の自然や土地の特徴を一つの景色として、亀岡の名に由来する亀をモチーフに表現したものであります。丹波盆地で見られる朝夕の霧を白花系の植物で表現する試み、保津川を白川砂で表現することなど造園材料にもこだわりつつ、地域の特徴を良く反映した作品となっています。

京都丹波地域の魅力を伝える本作品は、フェア会場においても注目されるものになると期待しています。

京の丹景

～亀が紡ぐ京都・丹波の景色～

緑化フェア「みどりの広場」プラン



0 0.5 1.0 2.0(M)

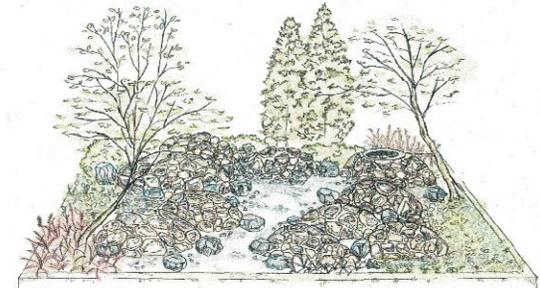
S = 1 : 30

平面図

凡例

番号	植物名	規格	数量	単位	単価	金額(円)	番号	材料名	規格	数量	単位	単価	金額(円)
1	イロハモミジ	H=2.5m	2	本	20,000	40,000	7	那智黒砂利	8分 崩れ 2t(袋入り)	6	袋	6,000	36,000
2	ブナ	H=2.5m 株立ち	1	本	20,000	20,000	8	御形砂利	3分 20kg入り(自乗)	6	袋	3,000	18,000
3	スギ	H=2.0m	2	本	7,000	14,000	9	木鉢	陶器製	1	個	7,000	7,000
4	ツツキツツジ	H=0.3m	10	本	300	3,000	10	ベ・ヤツム	5tポット	20	ポット	400	8,000
5	花崗岩(亀岡産)	100~300mm 雑割	2	t	35,000	70,000	11	ユーホルピア	3号ポット	50	ポット	500	25,000
6	十津川石	200mm~300mm	2	m ²	12,000	24,000	12	季節の花苗	アングロニア、ストック等	50	ポット	200	10,000

合計金額(概算) 275,000円



スケッチ

コンセプト

この庭のタイトル「京の丹景」は、京都丹波の「京」と丹波の「丹」、その風景の「景」を組み合わせた言葉にしました。京都丹波の自然や土地の特徴を、一つの景色として表したいという思いから、このタイトルとしました。

緑化フェアの中心となる亀岡は、昔「亀山」と呼ばれていたことから、この庭では亀をモチーフにしています。

大きさの違うたくさんの亀を、小山の形で表現し、それらがつながることで、京都丹波に広がる小高い山並みを表しました。

これらの亀の山の間にできるくぼみは、山に囲まれた丹波盆地を表しています。また、丹波盆地で見られる朝夕の霧を、ユーホルピアを中心に細かな白い草花を使って、やさしく広がるように表現しました。

庭の中央付近にある亀の山には、南丹市にある「京阪神の水がめ」と呼ばれる日吉ダムをイメージし、水鉢を埋め込みます。ここを水源として、京都丹波を流れる保津川を、枯山水で表現しました。

保津川の流れには白川砂を使い、流れの溜まりに黒い石を配置しています。この黒い石は、京丹波町の特産品である黒豆をイメージしています。

流れの両側にはイロハモミジを植え、季節の変化を感じられるようにしました。

また、背景にはスギやブナを植えて、丹波高原の自然を表現しています。この庭園「丹景」は、亀の山がつながり、景色を紡いでいくことで、京都丹波の地形や自然、地域の特徴を伝える庭としています。

(審査委員)

一般社団法人 日本造園建設業協会 副会長・事業委員長 正本 大

今回も総数 600 を超える熱のある作品応募いただきました。作者やご指導頂きました関係者の皆様に感謝申し上げます。皆様のアイデアや力を合わせた作庭に毎年感激しながら審査に臨んでいます。

自身のカラーを打ち出しながらも、時代の要請や未来に向かって託す思いを反映した作品を創り上げていく事が、造園デザインの魅力向上につながります。ネットの情報に頼るだけでなく、常にフィールドに出て、考えを巡らせるようにしてみてください。永い月日を経てその作品が地域の機能や美観を担い、顔となっていくようチャレンジを続けてもらえるよう願っています。